

新春ごあいさつ

内藤 晴夫

(エーザイ株式会社社長)



謹んで新春のお慶びを申し上げます。

平素より弊社医薬品事業につきまして、格別のご高配を賜り厚く御礼を申し上げます。

昨年の3月11日東日本大震災で平時に有事を語りそれに備えることがいかに大切で、同時に大変な意識付けが要ることかを強く感じております。震災直後より現地に東京から入り、物資を持ち込めた拠点は山形空港でした。官側も活用すると同時にJALの臨時便が運行し、私共もそれを利用し仙台に入ることができました。震災直前まで地方空港について無用論やハブ化したもののみを残すといった議論がありました。果たしてそれは真に有事を考えてのものだったのか、あるいは競争や経済計算のみを尺度としていたのか検証しなければなりません。また事業仕分けの中で東京都の海抜ゼロメートル地帯などへの防潮堤の是非をめぐる話がTV等で報じられ、評価者側の代表が「何年に一度を想定しているか」との問いに、説明者が

「数百年に一度の規模の洪水に備えたプロジェクトである」と答えていた記憶があります。この説明に対して冷笑的態度で議論が終始したことを憶えております。

大混乱の中で「釜石の奇跡」と呼ばれる出来事があることを知りました。同市小中学校にいた約三千名の児童・生徒は一名の被害もなかったというものです。ご存知の通り釜石は世界最大最強の防波堤を数十年を費やし構築し有事に備えていますが、減弱されはしたものの津波はそれを破壊しておし寄せました。同市の学校は平時に徹底した避難訓練を励行し、ルートをはじめ、誰が誰を確認するか等のルーチンについて繰り返し習熟するまで実行していたと言われています。実際年長の児童が年少の者の手を引いたり、背負ったりして足早に迷いなく避難する様子を映像で見ることができました。防波堤の如き物系の備えと避難訓練等の人系の備え、その双方が大切で、たとえ物系がワークしなくても人系がその損害を減ずることができるところを学んだ思いがいたしております。

ひるがえって医療を見ますと平時の今、有事の事柄を本格的に考える必要性を感じるものです。有事の解釈は多様ですが、超高齢化社会、死亡者の増大、要介護者の拡大、エンド オブ ライフの重要性の拡大等、いずれも重要な項目であります。日本の国民にとって医療イノベーションの成果物が実地医療の場で用いられ、治療不能の病患が治り、QOLが改善し、安心や経済的効果を得ることは極めて重要度の高い課題であります。いわゆる「イノベーション・アップテイク」を経済的理由で遅滞させてはならないと確信しています。このための財源、供給体制、報酬体系

等の骨格についても、国民皆保険のレガシーをしっかりと受け止める中で議論すべきと考えます。本年は治療と介護を見直すよき機会でもあり、この議論の活発化を期待いたします。

年頭にあたり、本年も引き続き臨床医家の先生方のご指導ご鞭撻を賜りたく、心よりお願い申し上げます。